Japanese Association for Religious Studies



素材をもとに詩的あるいは象徴的に表現することに見出す。つまり宗教とは、想像力を媒介とした、人々の熱望や欲求についての自然発生的な表現形態の一つである。宗教と詩の決定的相違点は、詩はあくまで「空想の領域」に留まろうとするのに対して、宗教は人間の経験や現実―つまり「自然の領域」―にまで踏み込んでしまいがちだということにある。

自然主義に基づく象徴体系としての宗教というサンタヤーナの見解においては、宗教として象徴される理想や完全性は有限で相対的であり、その実現や完成はどこまでも不可能なものである。そして人々は、この不完全で有限な完全性を合理的で満足のゆくもの、美しいものと感じるのだという。このように限界づけられた宗教をサンタヤーナは「人間性の宗教」と呼ぶ。人間の本性的な惨めさと罪悪は、善の光によって照らし出され、神的なものへ接近する唯一の契機となる。人々に展望を示す善という理念は、元来「空想の領域」に属し、しかも、人間が生きてゆく上で刺激され促進される必要のあるものだという。

如何なる宗教的象徴群も、美の本質を含むが故に、愛すべき、受容すべきものである。愛という行為は、あるがままの対象それ自体だけでなく、その潜在的な善及び幸福の可能性をも含めて愛することであり、故に真の愛は試練を伴う。サンタヤーナは、（スピノザ倫理学におけるような）現実には到達できそうもない普遍的な善を、想像的・詩的に変換・昇華することで情緒的に満足させようと試みる。人間を神々に対する崇拝へと促す本能的な熱望、これこそが「究極的宗教」であると結論される。

空想の応用可能性を含意しながら自然主義を徹底する、すなわち超自然の余地を極力排除するサンタヤーナの詩的宗教論は、「空想の領域」における、美と想像力の自由に任せて飛翔する宗教の象徴的特質を解説する。理想的な宗教は理想的な詩と同一であると見なされ、束の間の理想状態を描き出す。ただし、この宗教が象徴する理想はあくまで歴史的・文化的な制約を受けた不完全なもので、不完全だからこそ美しく愛すべきものとして評価される。そしてこの発想は、「空想の領域」を本能的に必要とする人間本性と、これに基づく自然的宗教へと通じていくのである。

## ルドルフ・オットーにおける宗教と社会問題

藁科　智恵

ドイツの神学者・宗教学者ルドルフ・オットーは、その主著である『聖なるもの』において宗教的体験の記述・分析を行っており、その学術的議論を中心に論じられることが多いことから、彼が政治的な活動に関わっていたということは、意外な印象を与えるかもしれない。しかし、彼はプロイセン議会選挙に出馬、議員を務めるなど、政治にも積極的に関わろうとした。この時代のドイツは、十九世紀中期からの農業経済から工業経済への移行という変化に伴って生じた労働者問題を背景として、ルター派教会がこれまで持っていた宗教と社会の峻別が揺るがされるような時代であった。ルター派内部での社会政策の転換は、一八九〇年に「福音主義社会協議会」が設立されたことによって社会問題への対応が奨励されることになるという出



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



来事に象徴的に表わされているといえる。発表者の関心は、オットーを当時の歴史的文脈において理解しようとするものであり、本発表では、オットーが一九二〇年に設立した宗教的人類同盟（Religiöser Menschheitsbund）を中心に、オットーにおける宗教と社会問題に関して、考察を加える。

宗教的人類同盟は、国際連盟が発足した翌年、一九二〇年にオットーによって設立される。その活動は、主に最初の四年間に集中しており、最初の会議は、一九二二年に、国際和解同盟、キリスト者＝革命派との会議との共同開催という形で行われた。オットーは、一九二四年に、インド学者、宗教学者ヤーコプ・ヴィルヘルム・ハウアーに宗教的人類同盟の議長の座を譲り、自身はその後、典礼改革、アメリカへの講演旅行、宗教史博物館の設立、アジアへの旅行を行う。一九二四年頃から、宗教的人類同盟は事実上活動停止の状態となっていた。一九二七年には、宗教的人類同盟を新たにしようとする動きが見られるようになり、米国の教会平和連盟（Church Peace Union）と共に、世界平和会議（World Peace Conference）を開催した。しかし、一九三三年に宗教的人類同盟はナチスによって解散させられた。

オットーは、同盟設立に先立って、一九一三年にパリで行われた「自由キリスト教と宗教的進展のための世界会議（World Congress for Free Christianity and Religious Progress）」において「普遍的な宗教は望ましいか、また可能であるか。もしそうならば、それはどのようにして得られるか。」という課題を与えられ、これについて話している。オットーは、「普遍的宗教」を作り上げることは、望ましくもないし、可能でもないと断言しつつも、諸宗教が自らのために共通の場を形成するという可能性を探ることは望ましいことであると述べている。ここには、後の同盟の構想が見られる。

また、宗教的人類同盟の第一回会議における講演「宗教的人類同盟に関して－世界良心とそこへの道」では、「世界良心」に係留することなしには、どのような企てにも価値がなく、国際連盟という政治団体を倫理的な側面から補完することが宗教的人類同盟の役割であることが述べられる。

先行研究における宗教的人類同盟の「政治団体」としての評価の低さは、むしろ、設立当初の同盟の理念から必然的に導き出されるものであるといえる。つまり、同時代に隆盛を誇った社会主義が目指した政治権力獲得というようなことは、宗教的人類同盟は当初から目指しておらず、あくまでも国際連盟という政治団体を倫理的な側面から補完するということが目指されていたのである。宗教的人類同盟は、ルター派教会内において、宗教と社会との峻別が揺るがされていたという事態において、その峻別が、オットーという人物を通じて現れた一つの形態であったといえるだろう。

## ハイラーの祈り論の現代的意義

宮嶋　俊一

今回の大会で「祈り」が重要なテーマのひとつであるのは、言うまでもなく東日本大震災後の日本における宗教の意味や役割に大きな関心が寄せられているからであろう。管見では、そ



NII-Electronic Library Service